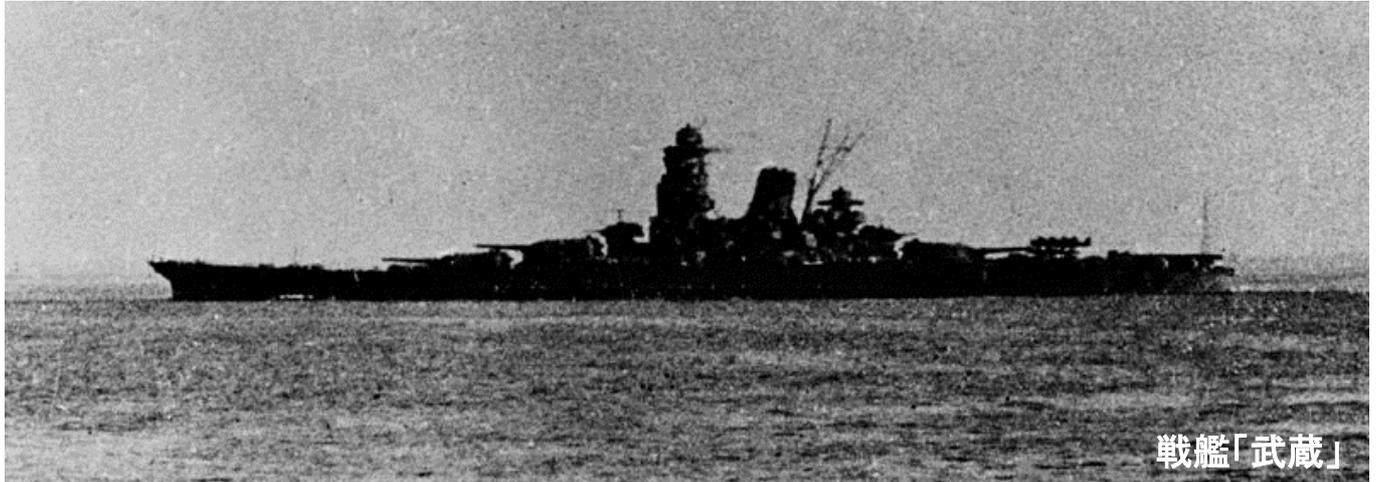


■激動の昭和17年

農林21号が北陸農業試験場で生まれた昭和17年(1942年)は太平洋戦争の真只中。前年末の開戦以来、破竹の勢いを誇った大日本帝国軍の支配地域が極大化し、同時に帝国海軍が壊滅的敗北を喫した「ミッドウェー海戦」の年(同年6月)でもありました。そしてこの年の8月、史上最大最強の戦艦「武蔵」(戦艦「大和」の改良型)が就役しています。陸軍戦闘機の「隼(はやぶさ)」の量産が始まったのも、昭和17年でした。



そんな激動の昭和17年当時の農林省の育種家は、どんな思いで農林21号を生み出したのでしょうか。良食味で収穫量の多い品種を開発することは紛れもなく当時の国策でしたが、農林省の育種家の想いは、平和な世界で幸せな家庭の食卓を支えることに尽きていたと思います。戦争の真只中で生まれた農林21号は、凶らずも戦後の貧しい復興期に「憧れの銀シャリ」として平和の中での発展を目指す日本の食卓を支えてきました。

高度経済成長の中、コシヒカリやササニシキなどの新しい品種が良食味の銘柄米としてもはやされる時代になっても、その美味しさを知る食通からは「一番旨い米は農林21号だ」と評価されていました。しかし、生産性と効率化を求める近代農法とは相性が悪く、やがて農家から敬遠されて姿を消していきました。そして最後の生産地であった福島県のJAみちのく安達管内での栽培が途絶えたのは、東日本大震災の2年後の2013年。71年間に及ぶ農林21号の歴史は、ここで幕を閉じたかのように思えました。

しかし、その2年後の2015年3月、茨城県つくば市の農業生物資源研究所(ジーンバンク)に残されていたひと握りの種籾が、加賀市の農家と小学生たちに届けられました。それと時を同じくして、太平洋の海底で眠っていた戦艦「武蔵」が発見されたニュースが大きく報じられました。奇しくも同じ昭和17年に生まれた農林21号が再びよみがえろうとするときに、海底から姿を現した「武蔵」に、不思議な縁と、平和な時代とされながらも、困難な社会環境の課題に立ち向かわなくてはならない福島の人々への想いを新たにしました。

航空自衛隊の小松基地が隣接する加賀市の湖北小の子供たちは、轟音と共に舞い上がるF15戦闘機の姿を日常の風景として暮らしています。そんな風景の中に、冬と共に訪れるハクチョウやガン、そしてトモエガモなどの水鳥たちの姿があります。そもそもは、田んぼで餌を採る渡り鳥たちのために、共生農業に適した新たな特産品種を探す中で辿りついた「農林21号の復活」でした。共に生きる未来と平和への意志を、加賀市の子供たちが受け継いでいってくれることを、心より願いたいと思います。

(文責・株式会社アミタ持続可能経済研究所 主任研究員 本多 清)